

タイ上北部における JF 教師研修会の新たな試み

高塚直子

1. はじめに

タイ北部には、2001年度から現在に至るまで国際交流基金（以下、JF）から中等日本語教育支援のための青年日本語教師や日本語専門家（以下、専門家）が派遣されている。支援担当地域は上北部8県のチェンマイ、チェンラーイ、ランパーン、ランプーン、プレー、ナーン、パヤオ、メーホンソン県（以下、上北部）である。報告者は、2010年度から2012年度まで上北部に派遣されたJFの専門家である。JFの2009年度「海外日本語教育機関調査」によると、この地域では約60の中等教育機関が日本語を外国語科目として開講しており、タイ全体で日本語を開講している中等教育機関数の約4分の1が上北部にある。2002年度には上北部で約30校⁽¹⁾だった日本語開講校の数は2倍に増えている。上北部の専門家には、広域にわたる効果的な中等日本語教育支援が期待されている。

報告者の重要な業務の一つに、上北部の中等教育機関で日本語を教えるタイ人日本語教師のための教師研修（以下、研修）がある。稲葉（2002）によると、この研修はもともと新規研修⁽²⁾を卒業したタイ人教師の日本語力維持と向上のために通称「金曜研修」という名のもと、2001年度からチェンマイで始まった。研修を通して、現地タイ人教師の日本語力の向上と維持、日本語教授法に関する学習、ネットワークの構築と強化などの機会を提供し、上北部の中等日本語教育の質の向上に貢献してきた。しかし、年度を経るにつれ、研修の運営方法や内容に関して、いくつかの問題点や課題が挙げられるようになった。金曜日に頻繁に学校を離れて研修に参加することに対する学校や教育省からの批判や、日本語能力向上を目指した研修の成果が現場では見えにくいこと（木村2003）、新規研修修了生以外の若手教師から教え方に関する質問が出されたこと（鈴木2005）、チェンマイから遠い場所に住んでいる教員が研修に参加しにくいこと（内田2007）などである。

この3年間、現場の状況やニーズに合わせて、どのような研修の運営方法や内容であれば、効果的な教師支援、そして上北部全体の中等日本語教育支援につながるのかということを経験してきた。

2010年度は、現状把握が不十分であったため、今までの研修運営方法や内容を参考にしながら研修業務全般を行った。実施した研修は、チェンマイのユパラート校で金曜クラスと土曜クラスを14回ずつ、合計28回を通年開講で実施した。研修の目標は、「日本語のブラッシュアップ」、「日本語教授法について現場ですぐに使えるアイデアを学ぶ」、「意見交換と情報交換を通じたネットワーク形成」の3つとした。修了者は11名で、そのうち10名がチェンマイ県とその近郊のタイ人教師だった。参加者は勉強熱心で研修の雰囲気もよく、この研修での学びについて肯定的な意見も多かった。しかし、2010年度の経験を通して、研修の運営方法や内容に関する問題点が報告者自身の中でより明確になった。

そのため、2011、2012年度は以下の4点を新たな試みとして研修の運営方法や内容に取り入れて実施した。

- 1: チェンマイ県以外の上北部（以下、地方）の教師の「学びの機会」と「ネットワーク形成の機会」を増やす。
- 2: 研修内容を見直す。
- 3: 日本人教師も研修に参加できるようにする。
- 4: タイ国教育省日本語センター校システムと連動して教師研修を行う。

上記4点を踏まえ、2011年度と2012年度の研修は、チェンマイとチェンマイ以外の担当地域7県（以下、地方）で、半日または一日で終わる研修を計23回実施した。参加者の累計は340名で、研修1回当たりの参加者平均は約15名であった。

本稿では最初に、2011、2012年度の教師研修における4つの新たな試みについて述べ、その2年間に実施した教師研修の概要、成果、課題について述べる

2. 2011、2012年度の教師研修における新たな試み

ここでは、2010年度に研修を行った後に明確になった問題点を踏まえ、それらを改善するために2011、2012年度に実施した4つの新たな試みについて2.1～2.4で述べる。

2.1 地方の教師の「学びの機会」と「ネットワーク形成の機会」を増やす

2010年度に計28回のチェンマイ県での研修を実施した。しかし、その一方で、チェンマイ県での研修のスケジュールに縛られてしまい、地方への巡回指導の日程が組みにくくなってしまった。チェンマイでの研修参加者は11名のみであったため、広域にわたる効果的な教師支援が行われているとは言い難い状況だった。そのような状況の中で、2010年度の地方への巡回指導では、何人かの現地教師から、「チェンマイでの研修に参加してもっと日本語や日本語の教え方について勉強したいが、遠いし交通費は自分で出さなければならぬので参加できない」、「同じ県の日本語の先生を知っているが、会いたくてもお互い忙しくてなかなか会うチャンスがない」などの声を聞いていた。

そこで、チェンマイでの研修の頻度を減らし、地方の教師でも参加しやすい場所での研修の機会を積極的に提供できるよう、約2カ月に1回チェンマイのユパラート校で行う「チェンマイ研修会」と、約1カ月に1回、地方の中等教育機関で行う「地方研修会」の2種類の研修を実施した。

2.2 研修内容を見直す

今まで、日本語能力のブラッシュアップに重点が置かれてきたチェンマイでの通年開講の研修内容も見直す時が来たのではないかと考えた。その理由は2つある。「現場ですぐに使える日本語授法と日本文化の活動に関する問い合わせがあること」と「単発型の研修の内容を考える必要性があること」である。

日本語教授法の問い合わせに関しては、「生徒がひらがなやカタカナを全然覚えられません。覚えるためのゲームはありますか」、「〇〇の文法をどうやったら、楽しくわかりやすく教えること

ができますか」、「漢字を教える時、何かいいアイデアがありますか」、「教科書の○課の教え方がよくわかりません」、「教科書○課の復習のための楽しい活動があったら、今度の学校訪問の時にやっていただけませんか」のように現場でどのように教えたらいいのかわからないという質問を学校訪問時によく受けた。日本文化の活動に関しては、タイの中等教育機関では、文化祭や日本語キャンプ⁽³⁾などの日本語関連のイベントが多く、「どのような日本文化の活動をキャンプでしたらいいか相談させてください」、「日本文化の活動が苦手です。でも、生徒は日本の文化に興味があります。今度、文化の楽しい活動を授業でしてくださいませんか」などの問い合わせを受けていた。このような現場からの声を反映させるため、現場ですぐに使える日本語教授法や日本文化の活動を重点的に研修で取り上げた。

また、チェンマイ市内、もしくは近郊に住むタイ人教師より、今までチェンマイでの研修に参加できなかった理由の一部として、「チェンマイでの研修の頻度が高いこと」や「所属先での上層部教員との関係」が影響していることがわかった。「通年開講の研修だと学校の許可が下りない」、「公務員になったばかりなので、頻繁に研修に参加すると校長や教頭先生への印象が悪い」、「学校が忙し過ぎるので、チェンマイでの研修の回数が少なかったら参加できるかもしれない」などの声があった。

チェンマイでの研修の頻度を下げ、参加者が参加したい時だけ参加でき、その都度修了証がもらえる、一日(6時間)や半日(3時間)で終わる単発型の研修内容を中心に実施した。

2.3 日本人教師も研修に参加できるようにする

在チェンマイ日本国総領事館の「邦人関係概要」(2011)を見ると、上北部地域における近年の在留邦人者数は毎年増加傾向にある。特に、退職後の長期滞在者にとって生活がしやすい地域だという声をよく聞く。最近では、中等教育機関で教えている長期滞在者で、学校の直接雇用教師やボランティア教師に会う機会も多い。内田(2009)によると、2008年度に上北部で日本語を教えている日本人教師は26人で、上北部全体の日本語の教師86名の約3割を占めている。これらの日本人教師の背景は様々で、①配偶者やパートナーがタイ人の定住者、②退職後の長期滞在者、③JICAなどの日本の公的機関からの派遣教師、④日本の非営利団体からの派遣教師、⑤宗教団体からの派遣教師、⑥その他、日本からの短期・長期滞在者などである。日本人教師からよくある相談は、「教科書の使い方」、「日本語の文法の質問」、「タイでのクラスコントロールの方法」、「学校での人間関係の悩み」、「タイの学校のシステムの問題」、「就職活動」などである。日本人教師も研修に参加できれば、彼らが抱えている問題や悩みの解決のヒントを得るチャンスも増えるのではないかと考えた。

従来、この研修はタイ人教師の日本語力維持やブラッシュアップを目的として始まったため、参加対象は基本的にタイ人教師のみであったが、日本人教師も参加できるようにした。また、タイ人、日本人を問わず、所定の研修の過程を修了した参加者に修了証も発行した。

2.4 タイ国教育省日本語センター校システムと連動して教師研修を行う

JFの「日本語教育国・地域別情報」(2011年度)によると、タイの教育省は、日本語教育推進のため、全国に27の日本語教育推進センター校(以下、センター校)を定めている。センター校

には、教師研修や生徒の活動を実施する際のリーダー的役割が求められている。上北部8県には、4つの教育区に各1校、計4校の日本語センター校があり（①チェンマイ・メーホンソン県：ユパラート校、②チェンライ・パヤオ県：サマーキー校、③ランパーン・ランプーン県：ランパーンカラヤニー校、④プレー・ナーン県：ピリヤライ校）、できる限りこのシステムと連動しながら日本語教育支援を行っていくことで、より現場の実情に即した支援ができるのではないかと考えた。従来から研修を行っていたユパラート校以外の上記3つのセンター校とも連携を図り、地方研修はJFとの共催で実施した。

3. 2011、2012年度の教師研修

本稿2章の「2011、2012年度の教師研修における新たな試み」を踏まえて実施した、この2年間の教師研修の概要を述べる。

3.1 概要

2011年度と2012年度の教師研修の概要を表1にまとめる。

表1 2011年度、2012年度の教師研修の概要

項目	内容		
①名前	「JF北部タイ教師研修会」(1. チェンマイ研修会 2. 地方研修会)		
②目的	1. 授業ですぐに使える日本語教授法や日本文化の活動について学ぶ 2. 意見交換、情報交換を通したネットワーク形成		
③スタイル	参加者が授業や活動に学習者として参加し、体験から学ぶ「参加・体験型」を中心とする。		
④レベル設定	初級修了程度～初中級		
⑤対象	上北部の中等教育機関で教えているタイ人・日本人日本語教師。上北部の高等教育機関や民間の日本語学校の教師やボランティア教師も参加可能。日本文化の研修の場合、定員に余裕がある場合は生徒の参加も可能。		
⑥参加条件	所定の研修実施日の指定された時間内全てに参加できること。学校から参加の許可を得ていること。		
⑦申し込み	各研修の申し込み締め切り日までに申込書を報告者にメールかFaxで送る。		
⑧修了証	所定の研修内容を修了した全ての参加者に修了証を発行する。		
⑨交通費・宿泊費	全て自己負担。		
⑩運営スタッフ	報告者、研修開催校の日本語教師（以下、スタッフ）		
⑪運営業務	報告者: 企画、研修開催先へ開催依頼の手紙送付、広報、申し込み受付、招聘状・修了証作成、研修資料・教材準備、講師招聘、講師への謝金の支払い スタッフ: 教室の使用許可願の作成と提出、会場準備、当日の受付、茶菓・昼食の手配、修了証作成		
⑫講師	報告者、JFBKK ⁽⁴⁾ 専任講師、上北部中等教育機関日本人・タイ人教師、上北部高等教育機関日本人・タイ人教師、タイ東北部中等教育機関日本人教師、日本の教育機関の日本人教師、チェンマイ在留邦人		
⑬開催回数と開催場所		チェンマイ研修会	地方研修会
	2011年度	7回（◎ユパラート校6回、モンフォート校1回）	6回（◎CR, ◎LAP, MAE, ◎PHR, NAN, PHO）
	2012年度	3回（◎ユパラート校3回）	7回（MAE, ◎PHR, MAE, ◎LAP, ◎CR, NAN, LPN）

⑭時間	一日(6時間)、または半日(3時間)開催とする。チェンマイ研修では、開催先のユパラー校の都合がよい場合、金曜日と土曜日のクラスを開講する場合がある。
⑮欠席の場合	できるだけ事前連絡をする。

*◎=日本語センター校(2.4参照)

**CM=チェンマイ、CR=チェンラーイ、LAP=ランパーン、MAE=メーホンソン、PHR=プレー、NAN=ナーン、PHO=パヤオ、LPN=ランブーン

3.2 研修参加者に関する情報と考察

2011年度と2012年度に実施した第1回から第23回の研修参加者の「県別参加者内訳」(添付資料1)をもとに、参加者に関する情報と考察を述べる。

- ・それぞれの研修開催校の教育区⁽⁵⁾に属している累計参加者の割合は平均82%であり、参加者が地理的に参加しやすい場所で教師研修を行うことは、効果的な地方教師支援につながると考える。
- ・チェンマイ県、ランブーン県、ランパーン県のどれか1か所で研修を行った場合、この3つの県は近接しているため、この地域の参加者は、これら3県のどの地域の研修にも参加しやすいようだ。
- ・プレー、ナーン、メーホンソン県の3県は、研修開催校の教育区に属する参加者の割合が毎回100%だったが、実際はそれぞれの県からの参加者のみだった。

3.3 共催機関

本稿3.1概要の表1の「開催場所」に共催機関や開催県を記す。第2回の研修は、北部タイ日本語教師会と北部タイ中等日本語教師会、第20回の研修は、日本の住友財団にも共催機関として加わってもらった。

2年間で23回行った教師研修のうち15回(65%)を上北部タイ中等教育機関日本語センター校と共催し、上北部にある4つの全てのセンター校で研修を行うことができた。どの共催機関も研修開催と運営のサポートに非常に協力的だった。

3.4 教師研修の講師、時間配分、テーマ

添付資料2にあるように報告者が全研修会(137.5時間)の約68%(93時間)を担当した。その他の研修時間の約30%(41.5時間)を、上北部中等教育機関のタイ人教師(4名)、上北部中等教育機関の日本人教師(2名)、上北部の大学の日本人教師(1名)、日本の日本語学校の教師(2名)、JFバンコク日本文化センターからの日本人講師(1名)、チェンマイ在留日本人(1名)が担当した。

また、3時間という短い時間ではあったが、上北部の中等教育機関と大学からの5名の発表者による「実践報告会」も開き(第14回研修会)、中等・高等教育機関の教師が情報交換や情報共有をする機会も持つことができた。

研修で扱ったテーマは、「初級の日本語指導」と「日本文化活動」を中心とした。

3.5 研修の成果と課題

満足度を聞くアンケートを第5回のチェンマイ研修より実施した。

表2 2011～2012年度アンケート結果 満足度 (第5回～第23回) <回収率85%>

	参加者累計	回答者累計	とても満足	まあ満足	やや不満	とても不満	無回答
2011年度(第5回～13回)	153	126	85(67.4%)	29(23%)	3(2%)	0(0%)	0(0%)
2012年度(第14回～23回)	136	119	101(85%)	17(14%)	1(1%)	0(0%)	0(0%)
累計	289	245	186(76%)	46(19%)	4(2%)	0(0%)	0(0%)

表2を見ると、参加した教師や生徒から概ね肯定的に受け入れられたと考える。

2年間を通して、チェンマイと地方で行った研修は、「授業ですぐに使える日本語教授法や日本文化の活動について学ぶ」、「意見交換、情報交換を通じたネットワーク形成」という2つの目的にほぼ沿った形で行うことができたと考えている。

ここでは、教師研修のスタイルと、目的1・2(表1)のそれぞれについて成果と課題を述べる。さらに、「チェンマイと地方の『学びの機会』」、「上北部の日本人教師支援」についても述べる。

3.5.1 「参加・体験型」の研修スタイル

研修のスタイルは、最初に参加者に学習者として授業に参加してもらい、その後に補足説明、話し合い、質問、発表などの時間を取る参加・体験型の学習を多く取り入れた。これについては、「生徒役になって活動を体験することで、生徒がどんな心境で授業を受けているかを知る良い機会となりました」、「今回のセミナーはとてもよかったです。なぜなら、実際に経験から覚えることができたからです」というコメントがあり、「参加・体験型」の研修は、参加者が学びやすく、現場の状況がイメージしやすくなるという点で現場の教師のニーズに合っていると考える。

3.5.2 研修目的1：授業ですぐに使える日本語教授法や日本文化の活動について学ぶ

研修の目的1について述べる。研修では、タイの中等教育機関で広く使われている教材や、大人数のクラスでもできる活動など、教師がタイの教育現場ですぐに使えるアイデアをできるだけ多く取り上げるように心掛けた。

日本語教授法については、「授業で実際に使うことができる楽しいアイデアやテクニックをたくさん学びました」、「次回も授業で使える楽しいアイデアがたくさんあるセミナーにしてください」、「研修で勉強したことを、明日学校でもやってみたい」などのコメントがあり、現場ですぐに使えるアイデアやテクニックへの学びに対する満足度が高かった。また、中等教育機関の授業では、教え方や活動の内容が「楽しく」、「飽きさせない」ことも重要なようで、「集中力のない生徒の好奇心をいかにして持続させるかには日々、頭を悩ませています。今回のアイデアは机に座ってしっかりと頭にたたき込む為のアイデアではなく、遊び感覚の勉強ばかりでこれなら授業で使えると思います」というコメントがあった。

日本文化の活動については、「授業や日本語キャンプで使える文化の活動が勉強できてよかった」、「日本文化のように体験しないとわかりにくいものは、今回の研修のように実際に体験して、学生にアウトプットしてあげたい」という声があった。

このように、研修での学習事項と現場のクラスを肯定的に関連付けたコメントが多く寄せられた。また、報告者が研修参加者の学校や日本語キャンプを訪問した際に、研修で取り上げた活動やアイデアが実際に現場で生かされていた場面も見ることができた。

3.5.3 研修目的2：意見交換や情報交換を通じたネットワーク形成

研修の目的2について述べる。研修中は、意見交換や情報交換が活発に行われ、それがネットワーク形成へのきっかけを作っていたと考える。タイ人・日本人双方から「グループでの発表や、他校の先生方と知り合い、交流することができたのも今回のセミナーのよかった点だと思います」、「自分のアイデアを発表するのもおもしろく、他の参加している先生方のアイデアも知ることができました。勉強になりました」、「いろいろな意見や、日本語教師として感じていることを、それぞれの先生、同じ立場にいる人々と共感、交換できました」、「いろいろな方がいろいろな状況で悩みながら、解決されているのだなあと思いました。また来週からがんばれそうです。ありがとうございました」などのコメントがあり、他者と交流しながら学ぶことに対して肯定的なコメントがあった。

地方の教師からは、参加者がアクセスしやすい場所で研修が行われたことで、「同じ県内で働いている先生に会ったことがなかったので、研修で初めて会えてよかった」、「近くの県で教えている先生と連絡先を交換しました」などのコメントがあり、地方研修の開催は、参加者にとって身近な地域でのネットワーク形成に貢献できたのではないかと考えている。

3.5.4 チェンマイと地方の「学びの機会」

2011年度より、地方研修を始めたため、チェンマイでの研修の回数は、2010年度の28回から、2011年度と2012年度を合わせて2年間で14回と大幅に減らした。チェンマイは、上北部の中で日本語開講校も日本語教師数も最も多い地域のため、他県より研修の回数が増えるようにしたが、従来の研修の回数を減らすことで、今まで定期的にユパラート校での教師研修で学んでいた先生方にとっては、学びの機会が減り、定期的に継続した日本語学習環境を提供することができなくなってしまった。しかし、チェンマイでは、この研修の他にもJFBKKとタイの大学が共催して行う「JF さくら地方研修会」(年2回)や教育省の外国語教育セミナー(不定期)などがあり、チェンマイの教師は地方の教師よりも学びの機会に恵まれていると見られる。

一方、研修を行うために報告者が積極的に地方へ出て行ったことは、参加者が「遠くの研修会場まで出向かなければならない」という地理的、経済的な負担を軽くできたと考える。地方の教師から「研修内容は何でもいいです。また来てください」と言われたことがある。特にチェンマイでの研修に参加することが往々にして難しい地方では、講師が積極的に現地に出向いて「学びの機会を作ること」がまずは大切だと感じた。

3.5.5 上北部の日本人教師支援

研修参加者の日本人教師からもタイ人教師と同様、研修での「学び」の機会を肯定的に捉えていることがわかった。学びについては、「日本語の教え方について、一人では思い浮かばない様々な教え方を学ぶことができました」、「私の漢字の授業はいつもつまらなくなってしまっていたので、授業に即使えるアイデアや資料をたくさんいただき助かります」などのコメントがあった。また、何人かの日本人教師からは、「タイ人の先生が、工夫して日本語を教えているのを見て勉強になりました」、「タイ人の先生の漢字の指導のやり方について聞くことができ良かったです」のようにタイの現場で教える日本人教師として、タイ人の教師の教え方も参考にしたいという声もあった。

また、研修の修了証について、「タイ人の先生と同じで、研修に参加した修了証が学校での評価の資料になるので、自分の住んでいる地域でJFの研修があるのは非常にありがたいです」と言われたことがあり、その国のシステムに応じた教師支援をタイ人教師と同様に現地で奮闘している日本人教師にも行っていくことも効果的な支援だと考える。

4. おわりに

今回、チェンマイを含めた担当地域である上北部8県全体に研修事業を広げることができ、概ね参加者からも当事業を肯定的に受け入れてもらえた。まずは担当地域に出かけ、日本語センター校を初めとする現地の教師や学校側と協力しながら、地理的、経済的に「教師が参加しやすい学びの機会」を積極的に提供していくことが、特に地方への効果的な教師支援につながると考える。また、研修に参加したタイ人教師だけではなく、日本人教師側からも研修に参加したことへの前向きな意見が聞かれた。タイ人教師と同じ現場で教えている日本人教師に対しても、研修を通じた教師支援は有効であると考えられる。

研修の内容面では、多忙な日本語教師にとって、一日や半日の研修時間で完結する「現場ですぐに使える初級の日本語指導法や日本文化の活動」で、参加・体験型の学習を取り入れたものが現場のニーズに合っていることがわかった。報告者が担当した授業では、内容面が薄く、テーマの多様に乏しいことなど反省点も多々あるが、この経験を次につなげられるように日々精進していきたい。

最後に、2010年度から2012年度までの3年間、お世話になった全ての皆様に心より感謝を申し上げます。

注

- (1) 稲葉 (2002) の情報による。
- (2) 1994年からJFバンコク日本文化センターとタイ国教育省が共催している「中等学校現職教員日本語教師新規養成講座」の略称。タイでは、日本語開講校数に対し日本語教師の数が不足しているため、タイ人の公務員教師のための10カ月の中等教育日本語教師養成をJFバンコク日本文化センターで行っている。
- (3) 日帰りまたは2日間程度の泊りがけの日程で、生徒が学校やリゾート施設に集まり行う日本語や日本文化に関する体験学習の活動。
- (4) JFバンコク日本文化センター
- (5) タイ国教育省が定めた上北部にある4つの教育区のこと (2.4参照)。

参考文献

稲葉和栄「世界の日本語教育の現場から2002年度 北部タイの中等教育機関における日本語と中等教員の研修会」『国際交流基金』

<http://www.jpf.go.jp/j/japanese/dispatch/voice/tounan_asia/>

/thailand/2002/report04.html>2013年3月16日

木村智「世界の日本語教育の現場から 2003年度 学校派遣から教育省派遣へ」『国際交流基金』

<http://www.jpf.go.jp/j/japanese/dispatch/voice/tounan_asia/thailand/2003/report04.html>2

013年3月26日

鈴木由美子「世界の日本語教育の現場から 2005年度 タイ北部における日本語教育事情」『国際交流基金』

<http://www.jpf.go.jp/j/japanese/dispatch/voice/tounan_asia/thailand/2005/report04.html>2013年3月26日

html>2013年3月26日

内田陽子「世界の日本語教育の現場から 2007年度 日本語教育の地域格差を少しでも少なく」『国際交流基金』

<http://www.jpf.go.jp/j/japanese/dispatch/voice/tounan_asia/thailand/2007/report04.html>2013年3月26日

04.html>2013年3月26日

内田陽子「世界の日本語教育の現場から 2009年度 北部タイ中等教育の現場から」『国際交流基金』 <http://www.jpf.go.jp/j/japanese/dispatch/voice/tounan_asia/thailand/2009/report04.html>2013年3月26日

thailand/2009/report04.html>2013年3月26日

国際交流基金「海外日本語教育機関検索 2009年度海外日本語教育機関調査」『国際交流基金』

<http://www.jpf.go.jp/JF_Content/InformationSearchService?ContentNo=10&SubsystemNo=1&HtmlName=search.html>2013年3月26日

mNo=1&HtmlName=search.html>2013年3月26日

在チェンマイ日本国総領事館「チェンマイ情報 邦人関係概要 (1) 北部9県の在留邦人数(2006年～2011年度)」『在チェンマイ日本国総領事館』

<<http://www.chiangmai.th.emb-japan.go.jp/chiangmai/houjin.pdf>>2013年3月26日

国際交流基金「日本語教育国・地域別情報 2011年度 タイ」『国際交流基金』

<<http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/country/2011/thailand.html>>2013年3月26日

<添付資料1> 「県別参加者内訳」

	全参加人数	開催校教育区参加人数(1)	開催校教育区参加者の割合(2)	CM	LPN	LAP	CR	PHO	PHR	NAN	MAE	その他の地域
第1回CM	12	7	58%	7	3	1	1					
第2回CM	16(1)	11(1)	69%	11(1)	3		2					
第3回CM	12(1)	7(1)	58%	7(1)	3	1	1					
第4回CM	11(1)	11(1)	100%	11(1)								
第5回CM	11(4)	10(4)	91%	10(4)	1							
第6回CM	71(26)	43(16)	61%	42(15)	2	9(2)	2	6(3)	3		1(1)	6(5)
第7回CR	14(4)	12(4)	86%		1		11(4)	1	1			
第8回LAP	15(2)	10(1)	67%	1(1)	2	8(1)			3			1
第9回MAE	2	2	100%								2	
第10回PHR	15(7)	15(7)	100%						15(7)			
第11回NAN	5	5	100%							5		
第12回CM	10(3)	10(3)	100%	10(3)								
第13回PHO	10(3)	7(3)	70%	1				7(3)		2		
第14回CM	36(20)	27(18)	75%	27(18)	2	2		4(1)				1(1)
第15回CM	14(6)	9(5)	64%	9(5)	1	1	3(1)					
第16回CM	9(5)	7(5)	78%	7(5)	1	1						
第17回MAE	3(1)	3(1)	100%								3(1)	
第18回PHR	18	18	100%						18			
第19回MAE	3(1)	3(1)	100%								3(1)	
第20回LAP	18(3)	10(2)	56%	8(1)	1	9(2)						
第21回CR	8(2)	7(2)	88%				4(1)	3(1)				1
第22回NAN	3	3	100%							3		
第23回LPH	24(1)	14	58%	10(1)	14							
参加者累計	340(91)	251(75)		161(56)	34	32(5)	24(6)	21(8)	40(7)	10	9(3)	9(6)
研修1回当たりの平均参加者人数	15(4)	11(3)	82%									
累計参加者に対する日本人教師の割合	27%	30%		40%	0%	16%	25%	38%	18%	0%	33%	67%

* () 内の数は日本人。

* CM=チェンマイ、LPN=ランプーン、LAP=ランパーン、CR=チェンラーイ、
PHO=パヤオ、PHR=プレー、NAN=ナーン、MAE=メーホンソン

- (1) 研修開催校が属する教育区 (2.4 参照) からの研修参加者の人数。
(2) 「全参加者数」に対する (1) の割合。

<添付資料 2> 「教師研修の講師、テーマ、時間配分」

	担当	テーマ	分類	時間
第1回CM	報告者	日本語と日本語教授法のブラッシュアップ	発音、語彙、漢字、文法、教室活動	3×2
	JU1	「日タイ、タイ日翻訳のコツ」	翻訳	1×2
第2回CM	報告者	日本語と日本語教授法のブラッシュアップ	発音、語彙、漢字、文法、教室活動	3×2
	JS1	「PAT頻出漢字」、「タイ語のストーリーで覚える漢字」	漢字	1×2
第3回CM	報告者	日本語と日本語教授法のブラッシュアップ	発音、語彙、漢字、文法、教室活動	3×2
	TS1	「日本語能力試験問題体験」	試験問題体験	1
	TS2	動詞のおもしろい教え方	教室活動	1
第4回CM	報告者	日本語と日本語教授法のブラッシュアップ	発音、語彙、漢字、文法、教室活動	3×2
	TS3	漢字のおもしろい教え方	文字	1
第5回CM	報告者	ひらがなとカタカナの教え方①	文字	6
第6回CM	JJ1, JJ2	新宿日本語学校 江副式教授法 日本語教育セミナー	教室活動	6
第7回CR	報告者	ひらがなとカタカナの教え方①	文字	6
第8回LAP	JS2	ダンスを利用した日本語活動	教室活動	3
	報告者	やってみようベトナム！	日本文化	1.5
第9回MAE	報告者	ひらがなとカタカナの教え方①	文字	4.5
	報告者	やってみよう日本の切り紙	日本文化	1.5
第10回PHR	報告者	ひらがなとカタカナの教え方①	文字	6
第11回NAN	報告者	ひらがなとカタカナの教え方①	文字	6
第12回CM	JC1	日本の和太鼓をたたいてみよう！	日本文化	6
第13回PHO	JC1	日本の和太鼓をたたいてみよう！	日本文化	6
第14回CM	JFT1	世界の日本語教育とタイの日本語教育	日本語教育事情	1.5
		初級の日本語指導	教室活動	1.5
	上北部中等・高等教育機関教員	北部タイ日本語教育現場における実践報告	実践報告	3
第15回CM	JJ1	見える日本語文法＝江副文法	文法	6
第16回CM	報告者	初級の漢字のいろいろな練習や活動	文字、教室活動	3
第17回MAE	報告者	歌やゲームを取り入れた日本語のクラス活動	教室活動	6
第18回PHR	JC1、報告者	日本の和太鼓をたたいてみよう！	日本文化	6
第19回MAE	報告者	初級の漢字のいろいろな練習や活動	文字、教室活動	6
第20回LAP	TS4、報告者	視覚障害者のための日本語教育を考える	教室活動、文字	3
第21回CR	報告者	初級の漢字のいろいろな練習や活動	文字、教室活動	6
第22回NAN	報告者	初級の漢字のいろいろな練習や活動	文字、教室活動	6
第23回LPN	報告者	日本の和太鼓をたたいてみよう！	日本文化	6

* JU=大学日本人教師、JS=中等日本人教師、TS=中等タイ人教師、JJ=日本の日本語学校教師

JC=チェンマイ在留邦人、JFT=国際交流基金バンコク日本文化センター日本人講師

* 2 クラスを同じ内容で開催した場合：「授業時間数×2」